

## 文献紹介

高橋伸夫・田林 明・小野寺淳・中川 正 著：  
『文化地理学入門』

東洋書林 1995年10月

A 5版 224ページ 2,575円

本書は、学生や地理学に関心をもつ読者一般を対象として著わされたものであるが、とりわけ近時の大学改革のなかで増加している、入学してしばらくたったのちに専攻分野を選択決定する仕組みのなかに置かれた学生のニーズに応えることに意を払った入門書である。地理学という1つの学問分野を修めようとする伝統的な専攻体制のなかでは、文化地理学に関する知識は、人文地理学に内包される一部門として学ぶものであった。ところが、入学後に分野を選ぶ制度下においては、多くの学生の関心は既存の学問体系それ自体に対してよりも、国際関係や環境問題など、現実的課題に対するものがより強い。一般社会においても、旧来の分野タテ割り型対応の限界が指摘され、学際的、総合的アプローチが待望されている。大学や社会におけるこのような新しい状況に即して、これまでの地理学研究の成果をいわずに再編成してみせた成果が本書であるといえよう。

したがって、本書には、必要事項が要領よくまとめられていることや、入門書にふさわしくわかりやすい説明であること、といった利点もあるが、それ以上に、人文地理学の一部門としての文化地理学ではなく、むしろ、文化地理学という視座から人文地理学を包摂し、総合的分野としての文化地理学を樹立しようとしたところに最大の特色が求められると評者は考える。

具体的に内容を紹介したい。第1章は「文化地理学とは何か」(執筆：中川 正)である。文化地理学を学ぶ意義や文化の概念が、噛み砕いた語によって説明される。とくに、文化地理学に対する誤解や先入観を除く意味で①物質文化のみが対象ではない、②伝統文化のみが対象ではない、③村落社会のみが対象ではない、④理論的分析も行う点を指摘し、文化地理学の領域を、狭く限定されたものにとどめない視座を示した。第2章は「文化地理学の歩み」(中川 正)で、パークレー学派の動向を手堅く述べたうえで、人文主義あるいは構造主義的アプローチも文化地理学の流れとして位置づけた。文献を厳選し

て羅列的な記述にならぬようにした点で成功しているが、日本での動向において、『生活文化と土地柄』を含む佐藤基次郎の業績に言及がない点は惜しまれる。

第3章「文化地域とは(その1)——等質的な地域と機能的な地域」、第4章「文化地域とは(その2)——頭の中の地域」(ともに高橋伸夫)は、文化地理学研究を科学的に進めるうえでの有用な手法を示した。旧来の狭義の文化地理学研究においては、時として名人芸的な方法論に頼らざるをえない場面もあった。しかし、本書の構想するこれからの文化地理学においては、厳密な地域概念をふまえたうえで、因子分析による地域区分やメンタルマップ作成も視野に入れるべきとの見解である。

第5章「文化生態(1)——人間と自然環境のかかわり」、第6章「文化生態(2)——環境の改変者としての人間」(ともに田林 明)は、地理学の主題ともいえる人間と環境とのかかわりを論じている。環境決定論以来の環境論の流れも、また今後、より議論が深まるであろう環境問題、人口・食料問題も、いずれも本書の構想する文化地理学に包含されるわけで、積極的な問題提起といえよう。範囲の拡大のみでなく、独自の研究成果にもとづくブナ帯文化論も生態史として位置づけられた。

第7章「文化景観(1)——文化景観の形成と変容」、第8章「文化景観(2)——心の中の風景」(ともに小野寺淳)は、文化景観の形成過程を主として扱っている。日本における村落および都市景観の形成を古代から順を追って述べ、さらにそれぞれの景観形成者の心を読み解こうと試みる。

第9章「文化伝播」(中川 正)は、文化伝播における接触性拡大伝播、階層性拡大伝播、移転伝播の3類型を用いて、言語、道具、家屋など文化要素の分布と移動を説明した。過去の事象を説明するのみでなく、エイズなど今日的課題に対する伝播の地理的パターンの応用を提言している。第10章は「文化地理学の役割——むすび」(田林 明)である。

本書を通読して何よりも印象に残るのは、先にも触れたが、文化地理学を狭く限定してとらえずに、人文地理学をも包含しようとするほどの積極的な姿勢である。本書に提示された知見の部分部分は、そ

それぞれ都市地理学、歴史地理学、生態史、環境問題等のジャンルに属するとみることでもできようが、それらを貫く全体の視座が文化地理学的であることこそが重要である。まさに、文化地理学とは単に対象によって定められるものではなく、その視座が鍵となるものであろう。仮に対象によってその部門分けがなされるのであれば、極端な例では医療施設の分布を調べると医療地理学、美術館の分布を調べると文化地理学という分類では魅力に乏しいと思われるからである。

本書では新鮮な内容が多いだけに、逆に多くの学

生が文化地理学と聞くとすぐに頭に浮かべるであろう風俗習慣（正月行事や盆行事の地域特性、信仰、土葬・火葬習俗の分布、祭礼と地域組織など）や伝統工芸、郷土食に関することがらについてあまり言及がなかった点は少々残念である。むしろ、これらについては先行研究が少ないゆえに、読者や評者が今後取り組んでいくべき課題と考えるべきかもしれない。歴史地理学、人文地理学をも包含する新たな文化地理学の提唱として読むことができた。

（小口千明）

## 第169回例会発表要旨

### 近代における植木生産地域の展開 ～埼玉県安行を事例とした予察的検討～

卜部 勝彦

今日におけるわが国の主要植木生産地域の分布は、関東から九州にかけての太平洋ベルト地帯に集積している。個々の植木生産地域は、それぞれの多様な自然的条件に見合った特産樹種を確立し、さらにこの特産樹種を軸とする仲買業者主体の流通基盤に支えられて存立している。本報告は、今日の存立を検討するうえで不可欠と考えられる第二次大戦以前の植木生産地域を研究対象に、この時期における展開の予察を試みたものである。

植木生産地域に関する既往の農業地理学的研究は、産地形成の時期区分から藩政期に成立し第二次大戦前から特産地であった伝統的植木生産地域、戦後とくに都市開発などで緑化樹需要が増大した高度経済成長期以降に形成された新興植木生産地域、といった地域概念で検討されてきた。しかしながら伝統的植木生産地域に関する議論の蓄積は乏しく、本報告で事例にあげた埼玉県安行についても、松田(1971)が江戸の植木生産地域であった巢鴨・駒込の後背的苗木供給地と位置づけているにすぎない。むしろここでは、澤田(1984)が全国の伝統的植木生産地域の傾向として指摘するように、この時期の植木生産地域が果樹苗木や桑苗木を重要な生産物としていた状況をより詳細に実証することが重要であろう。

当時の植木生産を把握するには、庭園樹や公園樹・街路樹といった造園樹木の生産状況を取り上げる必要性がある。本報告ではこうした造園樹木に関する

全国的な統計資料に制約があることから、果樹苗木を中心に農商務省・農林省統計の数値を参考にした。統計数値の書式が統一された大正11年～昭和16年までの全国の果樹植木生産は、昭和10年の2277万本をピークに以後本数を減じている。昭和10年の生産上位県は、第1位が埼玉の504万本で以下愛知、福岡と続く。これら上位県での主要生産地は、埼玉が安行付近、愛知が稲沢付近、福岡が田主丸付近であり、いずれも今日という伝統的植木生産地域である。埼玉の主要果樹苗木は苹果（現在のリング）で、昭和10年の生産本数も144万本と対全国比65.7%を占めていた。また同年の柑橘苗木についてみると255万本の愛知が第1位（対全国比36.7%）で、埼玉は第20位にまで後退する。昭和初期における果樹苗木の移出入は、病害虫防除のために全国の生産地域で厳格な植物検査が実施されていた。埼玉県でも大正12年から施行され、植物検査所が安行付近8ヶ所（昭和9年）設置されていた。この検査に合格した安行産の果樹苗木の移出地（昭和9年）は、兵庫や東北各県、朝鮮半島にまで及んでいた。

明治初年、わが国では政府の果樹奨励策によって海外から苹果（現在のリング）、桜桃、葡萄などの新種を導入し、三田育種場などで苗木を生産し全国に配布していた。藩政期から繁殖技術を有していた安行は当初、三田育種場に苹果用台木を提供していたものが、やがて独自に苹果苗木他の生産を開始したものと思われる。その後、昭和初期にかけて全国的な果樹生産の振興とともに安行は、造園樹木よりも果樹苗木の供給地としての地位を高めながら発展し